

氏名（本籍） 大澤 里紗（東京都）
 学位の種類 博士（音楽）
 学位記番号 甲第11号
 学位授与年月日 令和2年3月19日
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項
 学位論文題目 ロベルト・シューマンの改訂作品の版問題におけるピアニストの選択
 —伝統と今日の可能性—

学位論文等審査委員

| | | | |
|--------|-----|----|-------------------|
| （総合審査） | 委員長 | 教授 | 久保田 慶一 |
| | | 教授 | 金子 恵 |
| | | 教授 | 加藤 一郎 |
| | | 教授 | 中溝 一恵 |
| | | 教授 | 山本 幸正 |
| | | 教授 | 横井 雅子 |
| （演奏審査） | 委員長 | 教授 | 久保田 慶一 |
| | | 教授 | 金子 恵 |
| | | 教授 | 加藤 一郎 |
| | | 教授 | 三木 香代 |
| | | | 若林 顕 （国立音楽大学招聘教授） |
| （論文審査） | 委員長 | 教授 | 久保田 慶一 |
| | | 教授 | 中溝 一恵 |
| | | 教授 | 山本 幸正 |
| | | 教授 | 横井 雅子 |
| | | | 村田 千尋 （東京音楽大学教授） |

審査結果の要旨

審査所見

学位審査委員会は、申請者 大澤 里紗（博士後期課程器楽研究領域）の学位審査修了リサイタルならびに学位申請論文に関して厳正な審査を行った。以下に、審査に関する所見を記す。

ロマン派の作曲家ロベルト・シューマン（1810-56）は、1850年代に、以前に作曲・出版したピアノ作品5曲を改訂し、改訂版を出版している。一般的な理解では、作曲者の最終的な意図は、初版よりも改訂版により反映されていると考えられるが、シューマンのこれら作品については、改訂やその後の他人による編集によって複数の版が存在し、現代のピアニストもこうした状況を反映して、あるいは利用して、独自の解釈でもって版を選択し、ときには異なる版を折衷的に利用する場合もある。対象となる5作品とは、『クララ・ヴィークの主題による即興曲』作品5、『ダヴィッド同盟舞曲集』作品6、『交響的練習曲』作品13、『ピアノソナタ第3番』作品14、『クライスレリアーナ』作品16である。

修了リサイタルは、2020年2月10日午後1時より、国立音楽大学講堂小ホールで行われ、大澤は、作曲者自身による改訂や後世の編集によって生じた複数の版とそれに関連する版選択の

可能性について、最も複雑な様相を呈している 2 作品、すなわち『変奏曲形式の練習曲』作品 13 (1852 年改訂版) と『ピアノソナタ第 3 番 (管弦楽のない協奏曲)』作品 14 (1836 年初版と新全集版付録) をとりあげ、演奏した。

最初の『変奏曲形式の練習曲』は一般的には『交響的練習曲』として知られるが、タイトルは 1837 年の初版に由来する。初版が出版されてから 15 年後の 1852 年に出版社からの提案を受けて、出版されたのが改訂版で、シューマンは初版から 2 曲の練習曲を削除し、タイトルも『変奏曲形式の練習曲』と変更した。初版は主題と 12 の練習曲から構成されたが、改訂版では主題、9 曲の変奏曲、フィナーレから構成された。シューマンの死後 1862 年に出版されたシュープリンク版では削除された 2 曲が復活し、Ossia という記号が付されて、演奏は演奏者の判断にゆだねられた。さらにブラームスは 5 曲の「遺作の変奏曲」を追加した改訂版を出版したが、これら 5 曲の挿入の箇所については演奏者に委ねられることになった。現在ではシュープリンクの改訂版がよく使用され、5 曲の変奏曲の挿入については多くの議論がある。大澤は今回のリサイタルでは、シューマンの最終意思が反映されたと考えられる、1852 年の改訂版を演奏した。

『ピアノソナタ第 3 番』については、シューマンは作曲段階で 5 楽章制の「グランド・ソナタ」を構想したが、1836 年に初版が出版される際に、出版社からの意向を受けて、第 2 楽章と第 3 楽章にあったふたつのスケルツォを削除し、タイトルも「管弦楽のない協奏曲」とした。しかし 1853 年に出版社からの提案で改訂版が出版される際には、削除したふたつのスケルツォを採用し、「ソナタ」とした。現在よく演奏されるのはこの改訂版である。しかし大澤は今回のリサイタルでは最終楽章として、「新シューマン全集」に収録されている、1836 年の草稿譜(全 382 小節)を採用している。改訂版の「プレスティッシモ・ポッシービレ」では音楽は目まぐるしく展開し、混沌とした世界となっているが、草稿譜の「プレスト・ポッシービレ」では激しさの中にも幻想的な情景が映し出される。モーツァルトのオペラ『ドン・ジョヴァンニ』のアリア「お手をどうぞ」の冒頭旋律が引用されているのも、興味深い。

以上のように、大澤は演奏者に演奏楽譜の選択を委ねるシューマンの初期作品について、果敢に挑戦して、シューマンのピアノリズム表現と版選択の可能性を最大限に追究することに成功したと言えるだろう。変奏曲とソナタという異なる多楽章形式の演奏に際して、作品全体を把握し、聴衆に大きな枠組みとして提示できたことも、彼女の作品理解の深さと堅固さを示したと言えるだろう。ただし、今後、研究すべき課題もある。ひとつは、和音を立体的にとらえることができず、音色が均一化してしまったことが指摘できる。もうひとつは、旋律の歌いまわしが十分ではないことで、シューマンに特有な旋律の紡ぎ出しに、さまざまな陰影をつけることができれば、さらに演奏解釈の幅も広がるように思われる。このような意味では、大澤の演奏はシューマンの音楽に果敢に挑戦するのであるが、その取り組みが真摯であればあるほど、シューマンの音楽の呪縛から自己を解放できなかったのではないかと思う。現代のピアニストは版選択の自由を獲得しているが、シューマンの音楽を超えて自己の音楽の昇華に至ることは容易ではないかもしれない。

修了リサイタル終了後、午後 3 時半より、口述試問が行われた。大澤の博士論文は 201 頁に及ぶ大部なもので、全体は 5 つの章から構成されている。第 1 章「改訂作品の概要と価値判断上の問題」、第 2 章「ピアノ作品における諸版の概要」、第 3 章「初版と改訂版の比較—5 つの改訂作品の改訂経緯と出版状況—」、第 4 章「録音資料からみる演奏者の版選択について」、第 5 章「総合的な考察とまとめ」である。

シューマンの初期ピアノ作品のうち、改訂が行われた 5 つの作品について、それぞれの版によって異なる箇所を丹念に比較して、その改訂の経緯を可能な範囲で検討し、またこれらの作品の

楽譜が実際の演奏でどのように利用されているのかを、録音資料によって後付け、演奏者がどのような版選択をしているのか、それがどのような判断に基づくものであるかを検討しようとした、独創性のある、また演奏と研究の双方の融合を図ろうとする意欲的な研究である。

しかし提出された博士論文からは、研究方法や叙述方法についていくつかの問題が指摘され、今後の研究課題もここから見えてきたように思われる。第1に、版の比較が表面的な比較に終わってしまって、シューマンの改訂の意図が明確に解明されていない。演奏者の立場から、改訂前後の音楽そのものの相違だけでなく、演奏効果や演奏心理についての言及があってもよかったであろう。第2に、典拠資料の扱いにおいて、間接的な引用が多いので、できる限り、原典資料を参照する習慣を身に付けてほしい。第3に、研究対象として版や録音資料それぞれについて、価値判断（資料評価）がされていないので、一応に網羅されてはいるが、そこから結論なり、傾向を見いだせずに終わっている。今後、文章の校正や学術的な表現への訂正、文献表の整理が必要である。また予備審査において指摘されていたことに十分に対応できておらず、特に論文タイトルは再考する必要がある。

以上のことから、大澤の修了演奏と博士学位申請論文は、国立音楽大学大学院博士後期課程のディプロマ・ポリシーに照らして、「博士（音楽）」 Doctor of Musical Arts の学位に相応しいと判断した。